

大宰府アカデミー・令和編 第14講 令和6年5月15日(水)質問及び回答(Q&A)

「少弐氏・大内氏の抗争と大宰府」

講師・回答：佐伯 弘次先生(九州大学名誉教授)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 「応永の外寇」では、対馬が朝鮮から攻められていますが、対馬には本当に「倭寇」の本拠地があったのでしょうか。また、宗氏と倭寇との関係はどうだったのでしょうか。

A/ 回答

倭寇に関しては、『高麗史』、『朝鮮王朝実録』、『元史』等の海外史料が主要なもので、日本国内の史料が少なく、実態の究明が難しいという特徴があります。『朝鮮王朝実録』には、「三島の倭寇」「三島の倭人」という表現があり、この「三島」とは、対馬・壱岐・松浦地方という考えが有力です。実際に、応永の外寇の直接のきっかけとなった1419年の倭寇は対馬の島民であると『朝鮮王朝実録』に出てきます。

対馬島主・宗氏は、宗貞茂の代から倭寇の沈静化に努力しました。それは宗氏が倭寇を押しやることによって、朝鮮との通交を有利にするためとされています。

Q/ 講座のなかで、少弐・宗体制の崩壊を述べられていましたが、その理由・背景にはどのようなことがあったのでしょうか。

A/ 回答

「少弐・宗体制」という言葉を作ったのは私です。これは、室町幕府における「細川・三好体制」という概念があって、それにヒントを得た表現です。室町時代、大宰府を追われた後、少弐氏は主として対馬に居住することになり、旧家臣である宗氏の庇護を受けました。宗氏は少弐氏の朝鮮通交も援助しました。少弐氏が対馬から筑前に進出する時も、常に宗氏の軍事的支援があり、一時的に筑前一太宰府を回復することもありました。少弐氏は旧地・大宰府を目指し、宗氏は貿易の中心地・博多を目指します。両者の利害が一致したため、こうした連合が成立したものと考えています。

しかし、講演でも述べたように、応仁の乱時に少弐氏が筑前を回復した時、千葉氏救援問題で少弐頼忠（政資）と宗貞国が不仲となり、貞国が帰島しました。少弐氏は文明 10 年（1478）に肥前に逃れ、九州に残っていた宗氏の家臣団は対馬に帰ります。こうした流れと並行して、大内氏の工作によって、室町幕府から、少弐氏に味方すべからずという命令が宗貞国に届きます。貞国はこれに従いました。つまり、少弐氏と宗氏の関係悪化と大内氏の政治的工作によって少弐・宗体制は崩壊したと私は考えています。

※ ご質問ありがとうございました。